

# 何人かの阿呆

奥村 快也 陸自70

「俺の考えでは世界で何人かの男がとんでもない大間違いをしでかした。その間違いのお陰で、俺はヨーロッパに行つて働き、君はシベリアで働くという馬鹿げたことになった。この何人かの阿呆の他には、世界中誰一人こんな馬鹿げた結果を望みはしなかつたんだ」：スラブ民族独特の人生哲学である」

高杉一郎が『極光のかげに―シベリア俘虜記―』（岩波文庫）で紹介している一節である。

高杉一郎は1945年に満洲でソ連軍の捕虜となり、捕虜収容所の中

でも最も過酷な懲罰大隊に送られて、ソ連軍の囚人ペーチャと一緒に働くことになった。そのペーチャが言つたのが冒頭の一節である。

ペーチャはドイツ軍の捕虜になつたことを咎められて懲罰大隊に送り込まれ、高杉一郎は捕虜としての反骨精神が災いして懲罰大隊に送り込まれた。

今のウクライナに侵攻しているロシアの何人かの阿呆がプーチンを表現していると言つても全くおかしくない。

プーチンのそもその成功体験の原点はグルジア（現ジョージア）における南オセチアの併合であった。当時エリツイン大統領の首相だったプーチンが強権を発動して軍事侵攻して瞬く間に南オセチアをロシア領に組み込んだのが最初の成功体験であった。さらにチエチエンの武装勢力がモスクワの劇場を占拠した時にも多くの市民を殺してまで武装勢力を殲滅したが、その時も力のある指導者と見なされて評価を高めた。

クリミア併合も国内的には喝采を浴びて、ドンバスの親ロシア派が武装蜂起したのもプーチン政権が後押しした結果であり、これもプーチン

の評価を高めた。プーチンは何か問題があれば武力で解決することにより国内的には評価されてきたのである。

日本でも同じような歴史がある。

日清・日露の戦争の勝利は第2次世界大戦のソビエトの大祖国戦争と同じように日本人にとって民族の誇りであった。それで、日本人は自分たちを過大評価し始めた。更に第1次世界大戦では、運よく勝ち馬に乗ることが出来て、国際連盟の常任理事国になり、世界の一等国に仲間入りしたと自信を持つようになった。それに欧米諸国は警戒感を示すようになり、1921年のワシントン会議では日露戦争以来の日英同盟を破棄することを求められ、主力艦の対米英比7割に制限されることになった。

当時、国内世論は対英米比7割の制限に対して不満であったが、交渉にあつた全権大使の加藤友三郎海軍大将（後の総理大臣）は「日露戦争は米英の国際的な支援があつたので戦つて勝つた。もし、米英と戦うという事であれば日本は勝てるわけがない。更に日本がいくら努力しても対米英比率で7割というのは国力の限界を超える目標である」と言っ

て、国内の強硬派をたしなめている。因みに加藤友三郎は日本海海戦の時の連合艦隊の参謀長である。

ところが、9年後の1930年のロンドン会議の時は補助艦艇の比率で同じような結論を不満として国内強硬派が条約破棄を唱えて、無制限の軍拡競争に突き進むことになった。随員だった山本五十六は慎重論を唱える賀谷興宣を殴ったとも伝えられている。

当時の政権争いの中で野党の政友会はこれを奇貨として統帥権干犯であると言つて与党、濱口内閣の民政党を激しく非難している。軍部ではなく政党間の政争の手段として統帥権が利用されたのである。これを嚆矢として統帥権はたびたび政争の手段や軍部の都合で利用されている。この後に日本が戦争に突き進む手段として統帥権問題は避けて通れない問題となる。

統帥権は当時の明治の元勳たちが今後、政党が政治の手段として軍隊を利用することを恐れて軍隊と政治を分離するために帝国憲法に入れたのであるが、それが政争の手段となったのは何とも皮肉なことである。軍部は石原莞爾や板垣征四郎の主

導のもとに1931年には満洲事変を引き起こし、翌年は五・一五事件、2年後は国際連盟の脱退、1937年支那事変、1938年国家総動員法、1940年に大政翼賛会成立、そして大東亜戦争（太平洋戦争）へ突き進んだ。今になって思うと日本そのものが熱狂に支配されて戦争に突き進んだとしか思えない。

ロシアの囚人のペーチャの言う何人かの阿呆にはその当時の日本の指導者も含まれている。

ソ連も第2次大戦の大祖国戦争に勝てたのは英米の支援があつたことを既に忘れていたのであろう。ロシアは今やEU諸国、アメリカを敵に回して戦っている。日本の支那事変から太平洋戦争をまるでなぞっているようである。

指導者の権力欲と名誉欲ほど、始末の悪いものはない。

今のプーチンがNATOの拡大はロシアの存立に関わる。その拡大を抑止して跳ね返すことがピョートル大帝と歴史的に肩を並べることが出来る歴史的な壮挙であると、自分はピョートル大帝と同じような歴史的偉人になるという馬鹿げたプーチンの妄想がロシア人、ウクライナ人の

みならず、世界中の人々を苦しめている。

エッセイストの山本夏彦の箴言に「人は昇り3年登つて3年、おまけで下り3年」というのがある。人は権力を握るとその権力にあぐらを掻き始めて必ず限界が来る、10年以上同一の人物が権力を握ると碌なことにならないと言っている。アメリカの大統領の任期も2期連続しても8年である。これはそれまでの歴史の経験値から導かれたものであろうか、実に良く考えられた制度である。プーチンの大統領としての任期は2000年からであるのですでに20年以上となる。これだけ権力を握ればその政権は腐敗して耐用命数を超えている。プーチンに反対する民主派のナワリヌイ氏等は弾圧されていて、プーチンの取り巻きはその意を汲むことに汲々として今回のウクライナ侵攻になった。

中国の習近平も10年を超す政権を狙っている。長期政権となった習近平も方向を見失い、台湾侵攻をする可能性が増してくるであろう。

ペーチャの言う何人かの阿呆に習近平が加わらないことを祈るばかりである。